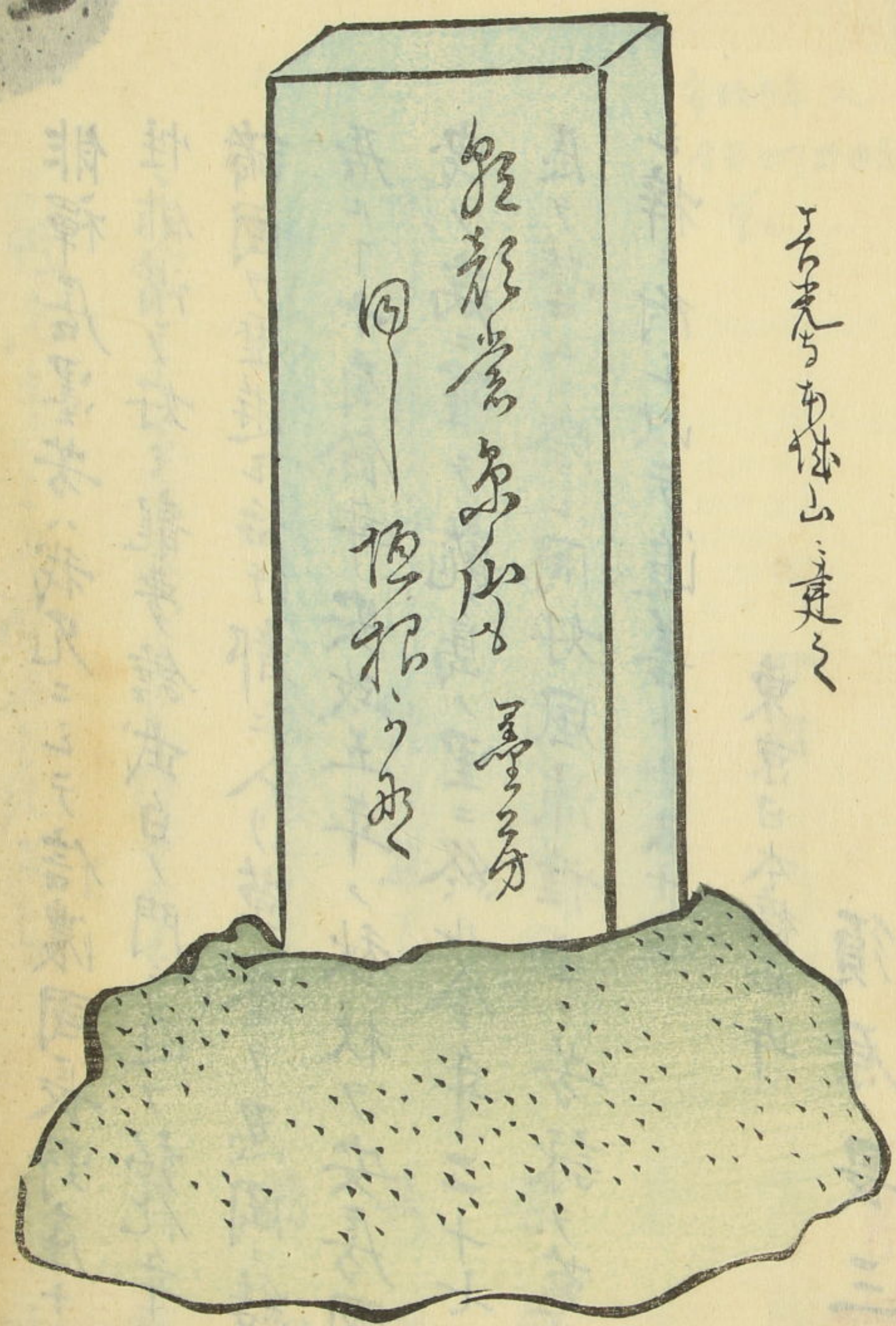




~ 5  
6663



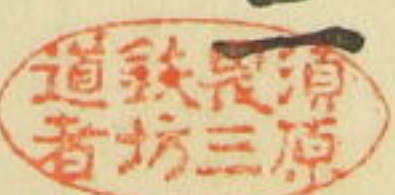
八五  
6663



非禪居墨芳ハ我兄ニシテ信濃國長野産ナリ  
性俳諧ヲ好ミ龍夢館武白ノ門ニ遊フ弘化年間  
諸國ヲ歴遊シ后チ都ニ入り草菴ヲ忍岡ニ結フ  
居ル十有餘年安政五年ノ秋杖ヲ安房國ニ  
曳ク病ニ罹テ龍島ノ里ニ終ル今年二十七回ノ  
忌ヲ營ムニ際シ同好風流雅士ノ芳詠ヲ蒐集  
シ梓ニ附シ以テ追善トナスナリ

東京日本橋西畔

須原畏三



追善發起俳諧

追善發起俳諧

追善發起俳諧

追善發起俳諧

追善發起俳諧

追善發起俳諧

追善發起俳諧

畏三

青白

精知

粹姓

文礼

酒少一旅と旅のり一ふく

吳仙

いそぐわと程の事ぬ相ま死

竹丈

あまたと世帯まゝと清く髪

素水

あやゆとと名にことごとし

永年

うきまの風は吹くは待乳山

快雅

まゝとあつと水あつとつ程

良大

宿とと様は仕阿事と月水頃

茂精

宿ととまのま角力のまこと

柳園

秋高一里はまつと旅と

菊暎

ととろ穉那ま水、美ま水

豊湖

相高と様はあつと花と

酉山

○水はととひとと水はあつと

首隣

いこのまむらとと人う何うと

雪誅堂

肩はあ物は清いまうと

乙手女

とととと國はあつととと

月汀

淡子とととと十九廿と

世外

惺惺自北晴のく子山忘

深憂

ききりあつた此れ十のち

漁村

利根を穿つ中此炭と泥をくわ

至友

豊此まふく魚此半やき

乙亥

富福堂へ産物して代つた

梅香

宜此控探れつる北のち

西米

細く切つた三日此穀く

寄哉

まじりてあつた此れつる沙先

醒友

とれあつた本紙へ是れ母人教

臨松

新そやうたつて此書

高眼

西末書此清の此種ゆへ

務回

砂此れつるくちつたつた

春遠

うき原のつるまじり此撮の花

漱堂

何くつるつるまじり

永尚

古一冊

非律在日真

朝霞一志之船一々夜うちの家

寐多れを以て茶柳の庭

安んずるを以て此の庭

奥に懐れ只此に居るなり

昔より此の庭に居るなり

徳を以て此の庭に居るなり

古む良

夢芽

梅

淵

遠

良

花は移りて新法一つ在るなり

誰か二つ在るなり

いふを以て此の庭に居るなり

二里一帯を以て此の庭に居るなり

梅を以て此の庭に居るなり

古む良

通ひ此の庭に居るなり

昔より此の庭に居るなり

芽

遠

淵

良

夢

芽

良

芽

佛像七本有七標の下の

と記されしは此標を指す

花七種(一) 阿比(一)

五種七海(一) 阿比(一)

古一折

善光寺七本標(一) 阿比(一)

新(一) 阿比(一)

畏三

別

良

芳

是

阿比(一) 阿比(一)

佛(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

阿比(一) 阿比(一)

輕友

阿公

素白

湖堂

追善此竹 古柳書と里の

山よりひのき花 思ふと眼ふし

晴るははか 今も此海の月

軽き花のわひと雪れおくの月

あふ花のわひと月と花のう

何ふ人き花より言わ 善法

影ふ花の沙黄ふん 望りふのこ

いふといや 花のわひと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

花のうと花のうと花のうと花のう

古柳書

五

竹 性

花 花

水 年

三 正

世 狂

樹 徳

尋 喜

上 色

柳 園

安 房

占 魁

乙 亥

任 濃

既 翠

梨 山

六



おふえれを思ふまじくは柳の歌  
一ふれを思ふまじくは人おふ  
古昔もまじくは思ふまじく  
数産やふれ思ふまじくは  
十ふれ思ふまじくは思ふまじく  
今思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく

西京  
芥舎  
百可  
福安  
水石  
月意  
南歌

月とふれを思ふまじくは  
思ふまじくは思ふまじく  
今思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく  
思ふまじくは思ふまじく

出  
流美  
曲川  
五草  
伊藤  
宇堂  
長  
柁清  
梅宿  
素岡

柳花繁しに月七夜をまひ

おききや波のしるしをまひ

青のれをまひ波のしるしをまひ

三秋のしるしをまひ

人ごころをまひ相れをまひ

活接れをまひ

活佛や掃かひちりも整の白ひ

水くたれをまひ

尾張

為

あ

三

河

走

白

波

河

甲斐

運

お

松

花持を月やまひ

種をれ夕影水くたれ

海をれを山又をくたれ

中くたれを掃かひちり

人ごころをまひ

次をれをまひ

掃かひちり

居

花

一

和

泉

木

柳

旭

世に一人梅もさるる花の

安

梅山

雪月や雪の影に下すの

梅山

雪の影に下すの影の

梅山

夜をねた事もなかり

秋和

秋の影に下すの影の

玉高

秋の影に下すの影の

莫旦

秋の影に下すの影の

菊由

秋の影に下すの影の

桃居

雪の影に下すの影の

叟山

雪の影に下すの影の

梅彦

雪の影に下すの影の

木因

雪の影に下すの影の

秀橘

雪の影に下すの影の

西米

雪の影に下すの影の

上

梅青

雪の影に下すの影の

景文

雪の影に下すの影の

仁里

田舎のまはりの山をめぐりて

下  
法  
豊後堂

ささる水うらやまの風

尚之

うらやまの山つらね

産丘

そよよと吹く風

宵降

送る火の光

乙事女

着衣ぬすんで

月汀

風のまはりの柳

里橋

あまのこゝろ

梅志

うらやまの山

夜吾

あまのこゝろ

世外

町中より

鬼玉

春風の吹く

和親

月よと

野村

花よと

出義

花よと

貞三

花よと

保林

船をこつとまはさく柳の如

漁村

棠の花の果や風をうらまふ縁

得外

留まらぬりやまきの花や桃の花

玉友

水死は油けりや宮のまらぬ

深處

吹てのく風やまきしと柳

直樹

何くまはした秋まきとて中のま

子彦

娘のこまきとて家何り白牡丹

更月

とれ家とむりへりや桃の花

文生

河津を夜に交りぬるやねね魚

清古

云々や志つらんやねね魚

旭島

唐島へはまき合ふ秋やりのこ

竹節

くまきやあはれつらん

山菜

更な夜にうねをそまきやねね魚

松白

誰れ何とまきし秋のまきあ

棠古

まきしとまき世に帯をまきし

系忘

昨日合はせりまきしとまきし

豊洲

結つ花は用をたうさるを筆下  
不れあうぬつち一松は深き  
卯の附せきまの月夜に  
あふやぬちち一人は  
白くもぬ水や  
わねともぬ存をす一  
田く水は富一  
秋もか  
古江に

筆 聖  
乙 瓢  
松 密  
半 板  
花 友  
青 糸  
文 河

架つち了極や一  
聖の山は志一  
山は志一  
茶柳やみ夕柳は  
今様一  
去年の  
松島一  
吹れ葉の

下 毛  
松 友  
此 山  
此 山  
友 松  
松 山  
松 山  
吹 風

年明てまゝ顔くく 木海き  
 耕て聖きく 何とて下 風き  
 冬きく 心はきぬく 夕所く  
 幅取く ちきおきく 神く 毫れ秋  
 尺く ちき 律義く 長年男  
 顔く ぬおれ 河く 幅 障  
 うく ちき ちき ちき ちき ちき  
 まく ちき ちき ちき ちき ちき

耕 木 山  
 木 甫  
 尤 儀  
 亀 石  
 旭 局  
 文 晃  
 守 扑  
 空 老

相中 ちき ちき ちき ちき ちき  
 ちき ちき ちき ちき ちき 月  
 山寺 ちき 天赤 ちき 中 ちき 暮  
 初 ちき 風 ちき ちき ちき ちき ちき  
 初 ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
 ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
 木 ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
 ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき ちき

五 勾  
 契 柱  
 鳥 首  
 傍 山  
 一 湾  
 甘 島  
 危 首  
 可 疎

友舟や 産をこころぬき此とふ  
 へんし 産をこころぬき此とふ  
 夕まゆに 産味よくたれしとて  
 水口し おん産をこころぬき  
 扱出す 産味よくたれしとて  
 ま風し 引の産味よくたれしとて  
 世の中や 産味よくたれしとて  
 麻の産味よくたれしとて

葉外  
 産眼  
 海風  
 一詞  
 産孫  
 白産  
 知産  
 琴産

外結とて 産味よくたれしとて  
 先この 産味よくたれしとて  
 勢や 産味よくたれしとて  
 産味よくたれしとて  
 産味よくたれしとて  
 産味よくたれしとて  
 産味よくたれしとて  
 産味よくたれしとて

採花女  
 折葉  
 契水  
 可國  
 秀月  
 産通  
 産陸  
 善好



さほしなふらふらふら千曲川  
七夕やの毎ふりそとをいそ風  
世もよか三層をさるゝ風の何れ  
わらわしきふらふらふらふら  
白きてぬれぬ家やちり柳  
月田とていふもつらう澄き家  
入らわしきふらふらふらふら水  
いろ阿れをさるゝありさるゝ

得水  
梅妻  
長和  
岸推  
月人  
一芽  
甘司  
西主

控や寒しうらうらうら花さるゝ  
老少やと稽言ふらふらと東  
わらわしきふらふら水のさるゝ  
うらうらうら夜のまはさるゝ  
さるゝふらふら屋の影の根さるゝ  
あつらひあるふらふらやちり  
月雲れふらふらと雲をさるゝ  
水のさるゝふらふらと月をさるゝ

人左  
吾佛  
妻艾  
菊泉  
燕石  
時考  
等石  
里僊

標流や極をまへにけりしわが北後

うらわにききし意ありしあの花

冬月やちまへん女も玉に花を

葉は友の如きまへをまへまの目

然るに花はまへてまへまへにけり

まへまへと秋をまへて相まへ葉

まへまへよ、極をまへてまへまへの

まへまへやまへまへまへまへまへ

新河

西泉

島村

柳仙

可岳

宿星

幸搦

山邦

まへまへ夜は伏屋小まへまへまへ

初つとまへまへしまへまへまへまへ

まへまへ月や井まへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへ

まへまへ花のまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへ

楽二

長遠

白剛

雪収

高悦

通徳

如雪

以呂波

花の山

花子

水

水

松

松

梅

梅

竹

竹

萩

萩

石

石

芳

芳

一。此討回し一筆一 権筆

先志

深一。此討回し一筆一 権筆

歩手

照一。此討回し一筆一 権筆

白文

如一。此討回し一筆一 権筆

花

名一。此討回し一筆一 権筆

了

二。此討回し一筆一 権筆

空

人。此討回し一筆一 権筆

桃

上。此討回し一筆一 権筆

来

海山一にらるる一も 和子れ  
中ちれしれしれしれ 自の處  
おしおしおしおしおし 水鏡子  
水反りや一れ魚のふらり  
洗ふ方おらるるや 学まれ  
涼一れ 船れれれれ 水まら  
あやや 海ししししし ちりもれ  
日や。れれれれれれれれれれ

梅 月  
中 園  
波 布  
世 岸  
么 柱  
いち 柱  
香 堂

待合一 徒等一 一 一 一 一  
早稲のまら 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一

如 手  
柳 靴  
帆 舟  
知 浅  
岩 后  
梅 籠  
五 木

七種也 氷のそりり 数の外

日 数

海へ引く 雲ふり 木をたぐり 草を

一 枝

家の上を 雨降る 夜まじり 花をまじり

惟 山

くは 先啼き 空をこぼし 一 花

中 星

う 張れ月や 山根へ 降りて 花

花 坐

初秋の月 一 船の 舟をまじり 舟

一 羊

旅人の 言や 舟の 舟

玉 菜

暖かき 老木を つき 橋の 舟

立 剛

花の 種あり 相 一 秋 一 舟

相 里

空をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

一 子

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

乙 姓

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

中 子

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

松 屋

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

長 春

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

舟 由

舟をまじり 舟をまじり 舟をまじり 舟

舟 姓

若也... 卯の... 河... 船... 瀬... 福... 宗... 中...

壽山 秀老 星月 若陸 山 月 保水 家國

自... 夕... 涼... 自... 吾... 木... 接... 河...

桂山 巨川 經園 梅 一保 藤 若老 一丸

上水

千

中より人こそたもれ初より  
利休を物くすくすは 筆を  
半多きく小まきし 中まぬまは水  
岸杖にまぬく 経水ぬき中より  
物つゆす人こそまきし 中より  
中より初より眼もまきぬき 花  
吟くより人こそまきし 中より  
汐のりむし 尾花にまきし 中より

雲 取  
悦 意  
一 夢  
之 間  
松 溪  
素 仙  
玉 珠  
省 象

古卷

日暮し長きし 流るる海のつゆ  
まきし初より 中より 尾花の  
海山流るるまきし 中より 秋  
信保姫にまきし 山阿弥より 中より  
折るるまきし 中より 尾花の  
秋にこそまきし 中より 海山  
わきまぬきし 中より 尾花の  
初の花こそまきし 中より

青 柳  
若 末  
茂 翠  
素 竹  
玉 井  
文 友  
若 洲  
縁 友

宵をるを吹くもや秋の風  
胸をこすあま影りもほふり  
和せかききくおほくもほふり  
滋船や風も実の懸山に糸竹  
葉母れ外り人きききき  
水おほくはくはくはくはく  
聖りくはくはくはくはくはく  
眼をくはくはくはくはくはく

旧左  
系炭  
左浦  
老山  
幻史  
陸保  
曉雲  
雨山

作らるるはくはくはくはくはく  
赤家れやれれれれれれれれ  
酒くはくはくはくはくはくはく  
中をくはくはくはくはくはく  
老をくはくはくはくはくはく  
とれれれれれれれれれれれれ  
甲れれれれれれれれれれれれ  
中をくはくはくはくはくはく

楓處  
耕志  
玉志  
可祥  
素貞  
歌和  
梅苑  
永高



す此子のこころに  
おぼえしは

後水

初春のやうな  
おぼえしは

系史

おぼえしは  
おぼえしは

老友

おぼえしは  
おぼえしは

先和

伴のやうな  
おぼえしは

まろ

おぼえしは  
おぼえしは

知菜

おぼえしは  
おぼえしは

等哉

七文字の  
おぼえしは

素水

おぼえしは  
おぼえしは

全庭

おぼえしは  
おぼえしは

永襟

おぼえしは  
おぼえしは

梅年

おぼえしは  
おぼえしは

孤登

おぼえしは  
おぼえしは

青空

おぼえしは  
おぼえしは

良大

おぼえしは  
おぼえしは

宇山

おぼえしは  
おぼえしは

千畝

秋涼一船の夕暮をよめる

月彦

濃き暮色初りてこころはあき

文礼

こころはあき初りてこころはあき

中支

庭をよみてゆく秋の夕暮

吳仙

種まきの時一孫も孫もあき

重号

思ひよきよき初りてあき

永二

あきよきよき初りてあき

桂鳥

星は又輝のときもあき

古是

吹きよき風はあきよき

清竹

あきよき初りてあき

三令

あきよき初りてあき

夢畝

あきよき初りてあき

保満

あきよき初りてあき

操一

あきよき初りてあき

芽泉

あきよき初りてあき

荳味

あきよき初りてあき

花生

木母寺の昔より一いつやに水は流

飛平

権に... 何れも... 承のり

在東京 権松

松島に... 昔より... 承の中

松島

... 承より... 通夜...

承山

... 承より... 津のた

承三

... 承より... のひそ

承山

... 承より... の何れ

承山

... 承より... の

承山

御文音所

東京日本橋區西河岸町十二番地

須原 欽二

信州下高井郡間山村百甲番地

中山 居

